



氷に降りてガチャンとリンクのドアを閉められたら、演じてる余裕なんて何にもないんです

——去年、現役を引退された理由は？

村主 去年の東日本選手権で予選落ちをして、オリンピックに通じる全日本に出場できないというのが区切りをつけなきゃいけないのかな、スケートに対する接し方を変えようかなと考えて、引退という形になったんです。

——それを受けとめるのは、つらいことでしたか。

村主 そんなことないんですよ。私の中で小さい時から目標は変わってなくて、それは喜びだったり楽しさだったり、このスケートを見た人からすごく救われたと言われるような作品を作ることが目標でしたから、今度は自分がその作品を作ればいい。私の一生の目標なんです。

——フィギュアスケートってものすごく複合的で、ジャンプなどの競技の部分と、芸術的・文化的なもうひとつの背景がある。でも、日本の優秀な選手ってやっぱり体育的だったんです。でも村主さんには違う世界観があって、この人だけが見てるものがあるんだろうなって思っていました。

村主 15歳の頃、カナダの振付師、ローリー・ニコルに出会って、それまで競技としてのスケートっていう見方しかしてなくて、ジャンプを飛ばす、回るっていうことしかわからなくて。きっかけは同い年にミシェル・クワンっていう素晴らしい選手がいて、ある年、ものすごく演技が変わったときがあったんです。それを見て、これ何かあるなって思ったら振付師さんっていうのがついて情報を得て。その当時は振付師さんの存在ってほとんど出て来なかったんで、自分もその人と会ってみたいと思ってトロントへ飛んだんです。それがすごいターニングポイントだったんです。芸術的な部分を与えてくれました。これ見て来い、あれ見て来いって言われて、スケートだけじゃなくて、バレエとか、舞台とかっていうものを見たときにすごい面白かった。わあすごいこんな世界があるんだって。明日また頑張ろう…っていう気になるんですよ。で、こういう演技がしたいって思っ

あなたが子どもの頃に抱いた夢は？ アスリートが子どもの頃に見ていた夢、そして夢を持つことの大切さを語る「夢を信じて」。インタビューはコラムニストのえのきどいちろうさん。今回のインタビューゲストは、オリンピックに2大会出場、昨年現役を引退されたプロフィギュアスケーター、振付師の村主章枝さんです。

——その時代、そっちに目を向けている人ってあんまりいなかったと思うんですけど。

村主 大きな転機になったと思いますね。教える立場になって、あらためてわかりますけれど、フィギュアスケートって人間性みたいなものが出るスポーツなんです。私も普段の居方に気を付けて、ちゃんとしてって言われてきました。実際、氷に降りてガチャンとリンクのドアを閉められたら、演じてる余裕なんて何にもないんです。もうありのまま。

——そうなんですか。

村主 すべてが出てしまうんですね。だから、人間形成じゃないですけど、心の在り方っていうのがすごく大事なんだなと。そういう事を教えていけるように自分はなりたくなって、それが今自分に与えられた課題ですね。



——上手いかわないことの方が多いじゃないですか、何でも。

村主 みんな、諦めちゃうんですね。失敗してもいいし、間違えてもいい、だけど諦めないでやろうよ、一緒に楽しんでいって進んでいこうなって思ってます。私は試合で大失敗しても、次の日にまた帰ってこうやって練習しようと思ってきましたから。

——それが一番大事なこともかもしれないですね。

「ジュピター」っていう曲を演じるときに、星を観てなかったら宇宙の壮大さみたいなものが分からない

——横浜には？

村主 生まれが千葉です。育ちはずっと横浜です。3歳から5歳までアラスカにいて、帰ってきてからはずっと

横浜です。

——スケートを始められたのは？

村主 スケートを習い始めたのは日本に帰ってきてすぐです。アラスカでもちよこつとやったんですけども。母が英語はすぐ忘れちゃうだろうけど、身体で覚えることだったらアラスカの思い出が一生残るだろうって。スケートのハマボウルの看板が我が家の近くにあったわけですよ。それをうちの母親が幼稚園の送り迎えをするときに毎回見てたわけですよ。それでスケートやらせてみようかって。でも後になって、ああ、あそこに看板があったのがいけなかった、こんなにお金がかかって大変だと思わなかったって(笑)

——その看板も運命ですよ。どんな子どもでした？

村主 もう天真爛漫。アラスカにいた頃には、シャケを釣りに行ったりとか、オーロラを観に行ったり、小学生に上がったら鎌倉の学校だったんですけど、その教育がものすごく面白くて、三浦半島の方で月に1回自然教室をやっていて、そこに稲刈りに行ったり、星を観に行ったりっていう体験をしていたんですね。やはりそういうところで感性っていうのは磨かれるっていったらおかしいですけど、自分の中で芽生えるものがあつたのかなと思います。横浜で育ててホントによかったと思う。横浜は今でも緑がありますね。自然がたくさんあるなかで遊んで、身体で感じるという体験は横浜じゃなかったらできなかったと思います。「ジュピター」っていう曲を演じるときには、星を観てなかったら宇宙の壮大さみたいなものが分からないし。あの曲の壮大な感じを表現するためには、小さい頃に体で感じたことはフィギュアスケートにつながってると思いますね。

——村主さんしか見ていないものってあると思うんですよ。村主さんだけがずっと見ているものがあって、そのずっと見てきたものはメインストリートであるべきだと思うんです。あなたはそれを叶える人ですよ。

村主 叶えたいですね、はい、頑張ります。

——僕も子どもの頃、釧路で育ててスケートをちょっとやったんですけど、夢に見ますね、気持ち良くて。すーって風が顔に当たってくる。冷たい風が当たってくる。ある種の快感っていうか。

村主 子どもたちにスケートってこんな感じなんだよ、1本の刃で氷の上を立つって言うことを一回は体験してほしいっていうのはありますね。

PROFILE プロフィール

村主 章枝(すぐり ふみえ) プロフィギュアスケーター、振付師。1980年12月31日生まれ。横浜市出身・在住。

6歳でスケートを始める。中学3年生の時に出場した全日本ジュニア選手権で2位に入り、初出場となった世界ジュニア選手権で4位入賞と、頭角を現す。2002年のソルトレイクシティオリンピック(5位入賞)、2006年のトリノオリンピック(4位入賞)に出場。表現の豊かさから「氷上のアクトレス」と呼ばれる。2014年11月、引退発表。現在は振付師として活動を続ける日々を過ごす。

取材を終えて

村主章枝さんはまっしぐらだ。15歳の出会いが彼女の人生を決めた。カナダの振付師、ローリー・ニコルさんの薫陶を受けることで「氷上のアクトレス」は生まれたのだ。そして、現役を退いた今、彼女は振付師として「日本のローリー・ニコル」の道を歩いている。直接向かい合うとエネルギーに満ちあふれた印象だ。小さな身体で何事にもぶつかっていく。そうやってノウハウをつかみ取ってきた。つまり先駆者ということだ。

